令和4年度第1回廿日市市総合教育会議 会議録

- 1 日時 令和5年1月6日（金）
開会13時00分 閉会14時40分
- 2 会場 廿日市市役所 201会議室
- 3 出席者（構成員）

市長	松本 太郎
教育長	生田 徳廉
教育委員	山川 肖美（教育長職務代理者）
教育委員	松本 良子
教育委員	岡本 美紀子
教育委員	片嶋 学
教育委員	大島 久典

（市出席所属）

- 【市長部局】 観光課（はつかいち森の野遊び場協議会）
- 【教育部局】 教育部長、学校教育課
- 【事務局】 経営政策課

○事務局

それでは、少し早いんですが、皆さんおそろいということで、令和4年度第1回廿日市市総合教育会議を開会いたします。本日の司会を務めます廿日市市経営政策課の藤川と申します。どうぞよろしくお願いいたします。本会議は、公開のもと開催し、議事録を公表することとしておりますので、よろしくお願いいたします。

本日の会議ですが、お手元にございます次第に沿って進めてまいります。

初めに、次第2、廿日市市長松本からご挨拶を申し上げます。

○松本市長 皆さん、改めまして、明けましておめでとうございます。

本日は、大変お忙しい中ご参集賜りまして、誠にありがとうございます。

また、平素は、本市の教育行政に多大なるご尽力を賜っておりますこと、心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

今年の話題ですけれども、やはり何と言ってもG7広島サミットだというふうに思います。主要7か国首脳が一堂に会して、地球規模の様々な課題について話し合いが行われますけれども、特にウクライナ情勢が長期化する中で、核の脅威にさらされている国際情勢にあっては、被爆地ヒロシマでサミットが開催されることは、大変意義深いことだというふうに感じております。

また、子どもたちにとっても、世界を身近に感じて、国際性豊かな心を育むまたとない機会だというふうに考えておまして、廿日市にとっても世界遺産「宮島」を世界にPRする絶好の機会であると考えております。

各国首脳の本市への来訪は、まだ正確なところは決まっておられませんけれども、昨年10月に設置いたしましたG7広島サミット推進室を中心に、オールはつかいちでおもてなしと万全の受入れ体制のもとでお迎えできるよう準備を進めてまいりたいと考えております。

本日の協議事項は、「未来を担う子どもたちに必要な力について」ということでございます。

社会情勢が目まぐるしく変化する時代の中で、子どもたちに必要な力とは何か、皆様からいろんな視点や角度からご意見を賜りたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

この機会が廿日市の教育の発展に向けて有意義な場となることを祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

○事務局

ありがとうございました。これ以降は着座にて進行させていただきます。

それでは、次に、次第3、本日の出席者でございますが、お手元に配席表をお配りしております。また、名簿もつけておりますので、これをもちまして紹介に代えさせていただきます。ご了承ください。

なお、名簿にはございませんが、本日の議題の関係部署の職員が同席しておりますので、紹介させていただきます。

教育部長の寺岡でございます。

○寺岡教育部長

寺岡でございます。よろしくお願いいたします。

○事務局

学校教育課長の雨河でございます。

○学校教育課長

よろしくお願いいたします。

○事務局

同じく、学校教育課の学事・生徒指導担当課長の齊藤でございます。

○学事・生徒指導担当課長

よろしくお願いいたします。

○事務局

なお、次第5の報告事項から、観光課長及び事業者の方が入室されますので、後ほどご紹介いたします。

続きまして、次第4、協議事項でございます。議事進行につきましては、市長により行います。市長、よろしくお願いいたします。

○松本市長

それでは、ここから私が進めさせていただきます。

次第4の協議事項、「未来を担う子どもたちに必要な力について」であります。

この協議の趣旨ですけれども、今、少子高齢化、深刻な人口減少が進んでいますけれども、そんな中で、DXであったり、また地球温暖化、ゼロカーボンですね、そういったものも求められておりますし、何といたしましても価値観が多様化してきている、いろんな考え方が享受される時代になってきているということでもあります。現在、こういった社会情勢が大きく変化する、これからもこういった社会変化というのは進んでいくだろうという

ふうにご考えております。

そのような中で、廿日市のまちづくりは、人口減少を前提にした新たなステップに進もうとしております。そんな中で、児童生徒の教育環境・方針は、まちづくりの大きな観点とご考えております。

これから、さらに社会の変化が予測されており、10年後、15年後の社会をどう生き抜くか、廿日市の子どもたちにどのような力を育てていくべきかを総合教育会議の場で協議する意義は大きいとご考えております。委員の皆さんから忌憚のないご意見を賜ればと思っておりますので、どうぞよろしくご願ひいたします。

それでは、担当課より説明を願ひします。

○学校教育課長

それでは、私のほうから、資料に沿ってご説明をさせていただきます。

資料のほう、ページが打っております。資料1、1ページ目をご覧ください。先ほど市長のほうからも話がありましたように、現在、日本は世界で最も速い速度で人口減少していると言われており、非常に危機的な状況にあります。また、AIの飛躍的な進化等により、私たちの生活もデジタル・トランスフォーメーションによる変化が既に始まっているところです。Society5.0時代において、人としての強みを活かしていく上では、一人一人が当事者意識を持って、他者と協働しながら、新たな価値創造を生み出すことが求められ、これまでの工業化社会とは違う思考であったり、発想が求められています。

そのような中、人に求められる資質や必要だと考えられる能力などはどのように変化しているのか、また、現在の日本の若者に見られる顕著な課題とはどのようなものなのか、これからお示しする資料を使ってご説明をしていきたいと思ひます。

まず、1ページ目の左上にあります折れ線グラフですが、これは日本経団連による企業が社員採用時に求める資質の調査結果になります。ご覧のとおり、2004年以来、16年連続で「コミュニケーション能力」が求められる資質のトップとなっております。

コミュニケーションの形は話す、聞く、書くなど様々ですが、その中でも特に話すことに苦手意識を持っている人が日本には多いという調査結果もあります。

就職・採用の場で面接が主流であるということは世界共通です。話す力があれば内定が取りやすいというのは火を見るよりも明らかです。また、採用の場で話す力が試されるということは、入社してからもその力が必要だからだということとも言えます。

そして、話す力が試されるのは採用の場だけではありません。広島県では、今年度の公

立高校の入試から、初めて全ての受験生に、自分自身のことについて、自分で選んだ言葉や方法で表現する「自己表現」が実施されることになっております。

次に、左下の表をご覧ください。ここには仕事に必要な能力がどのように変化していくかが示されています。これまでは、「注意深さ・ミスがないこと」であったり、「責任感・まじめさ」といったところが重視されていましたが、将来は「問題発見力」であったり「的確な予測」「革新性」といったものが一層求められていくとされています。

そして、右下のグラフですが、こちらは成人年齢に当たる18歳の意識調査の結果です。社会への当事者意識は、この調査を行った9か国中、最も低いという結果でした。特に社会を変えられると思う新成人が2割もいないということは、国家的な課題だとも言えます。これが実態なら、学校教育が目指してきた理想と今の現実の差をどのように埋めていくかを考えていかなければなりません。

それでは、次に資料の2ページのほうをご覧ください。この資料にあるとおり、昨今の教育改革もこれまでにない勢いで進んでおります。特に、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが生起した2020年から2022年までの3年間における教育改革は目覚ましいものがありました。その中で、小学校における外国語の教科化やタブレット端末の導入、多様性に対応した生徒指導であったり、部活動の地域移行、新型コロナ対応など、新たな取組や課題が浮かび上がってきています。

次に、資料3ページをご覧ください。こちらは、昭和から平成にかけての工業化において、これまでのところですが、同質性・均質性を備えた一律一様の教育・人材育成が求められており、一斉授業・平等主義のもとに世界トップレベルの教育・人材育成システムが日本の大きな経済成長を支えてきました。しかし、人口減少・少子化の深刻化とともに、目の前にある新たな価値創造、イノベーション創出、一人一人の多様な幸せを目指すSociety5.0時代、DX、そしてアフターコロナという大きな時代の転換期にある今、全ての子どもの可能性を最大限に引き出す教育・人材育成システムの抜本的な転換が急務となっております。

これまでの学校教育は、みんな一緒に、みんな同じペースで、みんな同じことをしていくことがよしとされてきました。しかし、このような教育は同調圧力を生み、正解主義に陥るというリスクがありました。そして、この同調圧力や正解主義などが、新たな価値の創造やイノベーションの創出の障害となっています。持続可能な社会の創り手を育むために、これからの学校教育は、それぞれのペースで自分の学びを進めることであったりとか、

対話を通じて納得解を導くといった多様性を重視した教育が必要となってきます。

次に、資料4ページをご覧ください。全ての子どもたちの可能性を最大限引き出す教育が求められている中、学校の教室には、発達障害や特異な才能、家で日本語を話す頻度が少ない子ども、家庭の文化資本の差による学力差など、学級には様々な特性を持つ子どもが存在し、これらの特性が複合しているケースも多くあります。同学年による同年齢の集団は、同調圧力が働きやすく、学校になじめず苦しむ子どもも一定数存在し、不登校・不登校傾向の子どもは年々増加の一途をたどっています。

資料の5ページのほうをご覧ください。ここには廿日市市の子どもの状況をデータで示しています。特別支援学級や通級指導教室で学習する児童生徒の急増、不登校数も本市においても例外ではなく、急増傾向にあります。そしてそれに伴い、子ども相談室のニーズも大変高まっております。このページの右側をご覧ください。と、廿日市市の子どもの学力について調査結果が出ていますが、全国的に見ても一定水準以上であり、現在、中段のほうに書いてありますが、日本語指導を受けている児童生徒も一定数います。コロナによる入国制限が緩和されてきている今、さらにこれらの児童生徒は増加していくということが予測されます。また、家庭の経済状況の指標の一つとなる就学援助率は約19%ですが、令和3年度の全国平均が約14%でしたので、少し高い水準にあります。

このように社会が大きく変化している状況の中、市内の学校が着実に物事を進めていくためにも、どのような児童生徒を目指して教育していくのか、市としての方針を示していく必要があります。そのために、総合教育会議で議論した内容を、今後示していく学校教育の取組方針に加味していきたいと考えております。

説明は以上となります。

○松本市長

まず、ただいまの説明で、ご質問等ありましたらお願いいたします。よろしいですかね。今、社会情勢はすごい速いスピードで変化していっています。今、5年先、10年先のことを想像しろと言われてもなかなか想像できないですね。そんな中で、社会が未来の大人たちに何を求めるのかというのをいかに私たちが想像するかという、ここにかかっているんだろうというふうに思っているんですが、その将来を予測した上で廿日市の子どもたちにどういう教育をしてあげられるのかといったところだろうと思うんですけども、そういったところでぜひ皆さんの忌憚のないご意見を賜りたいというふうに思うんですが、これから人口減少はもっとすごいスピードで進んでいって、現役世代に求められる負担はも

っともっと大きくなっていて、それを補完するために生産性や効率性を上げていくイノベーションはこれから革新的に起きていくんだらうというふうに思うんですけども、ある意味、競争もすごく激しいでしょうし、そういった厳しい社会情勢の中で、どういった子どもを私たちはこれから社会に出してあげられるんだらうか、どういうスキルを身につけさせてあげられるんだらうかといったところだらうと思うんですね。

やはり、まちの魅力というのは教育も大事な要素だと思っております、これから厳しい自治体間競争を勝ち抜く要素の一つだと思っています。教育の質を、いかに廿日市の質を上げていくかということも大事な要素だと思っていますので、ぜひ皆さんからそういった意味においてもご意見賜りたいと思っていますけれども、いかがでしょうか。大島委員、どうでしょうかね。

○大島委員

私のほうでは2つ大きくあると思っていて、1つは郷土愛を育む教育、もう一つは最先端の技術に触れることができる教育と、この2つが僕が教育委員をさせていただいて、いろいろなところで話を聞いたり、見聞きする中で感じた部分かなと。特にふるさと学習でいうと、例えば、この前、長崎で出席させていただいたんですけども、世界遺産があるまちに住む生徒って、たしか日本中で2%とか数%しかいないと。その市にいるということのをうまく生かして、今回のG7じゃないんですけども、もっと自分たちのまちって魅力あるまちなんだねというのを教育プログラムで組めたら面白いかなと、ここにしかない教育というのはできるんじゃないかと。

もう一方で、最先端の技術というところが、私のほうで、今、東京でも会社を友達とやっているんで、行くと情報格差がやはりすごいなというところもあって、その情報格差をどうなくしていくかというところが一つポイントかなと。例えば、東京で最先端でマイクロソフトにいた友人がいるので、講師として呼べたらいいですよと言っても、でもその交通費すら出ないんですという話もあったり。そういった最先端の技術に触れる機会とかというのをうまく捻出できれば、田舎でも今後って可能性は十分あると思うので、最先端に触れるプログラムというか、何か生み出せていければいいなとは思っています。以上です。

○松本市長

おっしゃるとおりで、今のように大事だということが分かっているわけで、やはりそこにお金を惜しむべきではない。やはり優先してそういったところに予算をつけていかなさ

やいけないんだろうというふうに思うんですけども、その辺の考え方はどうなんですかね。具体的に政策が上がってきてない中で予算をつけにくいでしょうけれども、具体的なものが出来れば、そういったところに積極的に目を向けていくことって大事なんだろうと思うんですけども。

○学校教育課長

そうですね、最先端の技術に触れるというのは、本当に子どもにとってもすごい魅力的なことだと思います。そのような機会を、ぜひ教育委員会としてもそういう場を提供できたらと思うんですけども、今、特にいろいろ、オンラインなんかで離れた人とも交流できたり、そういういろんな最先端のところに関わっている人たちの話を聞くこともできたりもすると思うので、またぜひそういうことは考えていきたいなと、予算あるなしにしても、ないならないでそういう方法はいろいろとあると思うので、それはぜひ探っていきたいなと思います。

○大島委員

そのときに、このコロナ禍というのもオンラインは、割と流行ってはいたと思うんですけども、大学もそうだと思うんですけども、オンラインの満足度というか、すごく低いと思うんですね。なので、今回でいうとDXの部分ができているところもあるので、そういったところとうまく連携して、何か新しい、生徒がこんなことしてみたいとか、生徒からアイデアが出てくるような、社会課題を解決するようなアイデアが出るような場づくりとか、それであればそんな予算もかからないと思うので、そういった何か今までのやり方と全く違うことも考えつつ、広くアイデアを出してみたらいいんじゃないかと。必要であればアイデアは持っていますので。

○松本市長

体のいいオンラインにならないような。

○大島委員

そうなんです。

○松本市長

何かあったらすぐオンラインという、体のいい言い方をするんですけども、やはり熱量って大事だと思うんですよね。

○大島委員

そうですね。熱量はやはりオンラインだと伝わりにくい部分もあるし、なのでちょっと

そういった面も含めて考えていただければいいかなと思います。

○松本市長

予算がないのでという、そういう逃げ方をしないようにします。

○大島委員

せっかく今回、上に、凸版印刷がいるので、まだ1名ですか。

○松本市長

これから30名という枠がありますので。

○大島委員

なのでうまくそういったところで、田舎でも第一線で仕事できるんだねというところの自信とか、そういったところも見せていければいいんじゃないかと。

○松本市長

そうですね。

○大島委員

はい。

○松本市長

ありがとうございます。岡本委員、いかがでしょうか。

○岡本委員

私は3つ考えました。

○松本市長

はい。

○岡本委員

1つはコミュニケーション能力です。それから2つ目は、やっぱり多様性ということを経験でも意識して教育していかなくちゃいけないということ。それから3つ目が、やっぱり探究的な学習というんですかね、さっき話に出たふるさと学習、廿日市はいいものがある、これを利用して探究的な学習、つまり子どもたちが考えて表現してというところでしっかりやってもらいたいなと思っています。

それで、特に言いたいのはコミュニケーション能力なんですけれども、先ほど雨河課長さんが話す力がとても大切だとおっしゃった。私もそれはそのとおりだと思うんです。私、ずっと国語の授業研究をやってきたんですけれども、コミュニケーション能力というのは、国語の力で言えば、話す力、聞く力どっちが大事かという、私は聞く力が大事だと思う

ているんですよ。

ちょっと話が長くなって申し訳ないですけども、昔、対話力をつけたいと5年生の担任が言ってきて、じゃ一緒にやろうと言ってやったんですけども、そのときに彼女に話す力より聞く力が大切なんだよ、という話をしたら、彼女は本当に、うなずきながら話を聞くとか、相づちを打つとか、そこから練習したんですよ。今から先生が話をするから、みんなうなずいて聞いてみてとか、そこから話をして、それでずっと進んでいったんですけども、対話する力もどんどんついてきましたが、そこにとどまらないで、その学習が終わった後、彼女が言ったことは、クラスの雰囲気が丸くなったと言うんですよ。すごいけんかっ早い子が多かった、仲裁ばかりしなくちゃいけないようなクラスだったんですけども、その学習を通してクラスの雰囲気が丸くなったと言うんですね。それは、人の話を聞くということは、私の話を聞いてくれた、私を理解してくれた、私を受け止めてくれたという、そういう関係になるんだなというのを改めて思ったんです。ただ、話のあんまり上手じゃない子どももいますけれども、聞き手がうなずきながら聞いたり、それで？とか、それは面白かったね、とか相づちを打ったり、また困ったときちょっと質問したり、それでどうしたんとか聞くことで、話すほうは何となくどんどん話ができるということがあったんですね。だからそういうのを通すと、私は、コミュニケーション能力って人間関係力みたいなものがあるって、何か潤滑油のような働きをするんじゃないかなと思ったんです。これは大人になっても絶対必要で、人間関係をつくる上で、やっぱりコミュニケーション能力、特に聞くということ、話すこと、これ自体を大切にしてもらおうと円滑にいくんじゃないかなという気がして、これずっと昔から私は思っていたんですけども、今日は話せる場があってよかったですが、やっぱり必要なんじゃないかなということを思いました。

○松本市長

聞く力というのは、まさに今、岸田首相が聞かない力なんて言われていますけれども、やっぱり話す方と聞く方って、派手さはやっぱり話す方にあるので、どっちかというところやっぱり求められがちなんだろうけれども、おっしゃるとおりで、今、それはそうだなと。やっぱり私たちも話をしている、しっかり聞いてもらえていると思うと非常にポジティブに話ができますので、やっぱり相手の目を見て話して、相手も目を見て聞いているな、うなずいてくれているなと思うと、やっぱり前向きに話ができますよね。雰囲気も丸くなったというのは、クラスが丸くなったというのは非常に理解できますね。あまり表へ

出てこなかった話ですね、これまでね、聞く力って。

○岡本委員

そうですね、話す力って絶対必要で、私も自分の思っていることをいかに相手にきちんと届けられるかという力というのは絶対必要だと思って、話す力と思っていたんですけども、あるときから、対話力って今言われているけれども、聞く力だなと思っています。

○松本市長

学校ではどうですか、聞く力に対する重きの置き方というのは。

○学校教育課長

もちろん話すも聞くも同じように指導はしていく。聞くことってすごく大事に学校でもしていると思うんですけども…。

○松本市長

例えばどういう指導方法をするの。例えば聞き方もいろいろあるじゃないですか。今のようにならずいたりとか、笑顔で聞くとか、目を見て聞くとか。

○学校教育課長

そうですね、実際、相づちを打つこととか、うなずきながらとか、反応してとかいうような指導をするような先生もおられますし、ただ、こういう形でないといけないということはないので、それぞれの先生たちの思いでやっているところはあるので、それを取り上げて大事にしていこうというのをやっていくというのは、市として面白いかなと思いつつ話を聞きました。

○松本市長

やはりセットでしっかり出していかなきゃいけないんでしょうね。

○学校教育課長

そうですね。

○学事・生徒指導担当課長

ちょっといいですか。

○松本市長

どうぞ。

○学事・生徒指導担当課長

小学校低学年ぐらいの聞く指導では、話している人におへそを向けるとか、うなずきながらとか、そういう聞く形をよく教えたりしますが、結局それが何のためにするのかと

いうことも同時にしていけないといけないし、何のためにするのかというと、先ほど話が出ているように相手を大切にすることだと思うんですね。だから丸い雰囲気になるというのもそうですし、要するにクラスに安心感が生まれるというか、居心地がいいとか、そういう安心感を得るという意味では、低学年のうちには形も大事にしながらそこに意味づけをして、やがては本当に心からうなずいたりとか、目を見たりというのが自然にできるようになっていきます。このように形も意味も一緒に添えながら取り組むことが大事だと思いますし、それによって安心感が生まれるということ、私、小学校出身なんですけれども常々思っていたところです。

○松本市長

現場としては聞く力もしっかり意識していますよ、ということ。

○学事・生徒指導担当課長

そうですね。

○松本市長

松本委員、いかがですか。

○松本委員

今回の件がすごく大きなテーマで、すごく難しいなと思って来たんですけども、教育委員会とかでいろんな個別の議題とかを議論する中で、その個別のことにばかりどうしても頭がいかってしまうんですけども、こういう大きなテーマというのは、まず、ちゃんと自分でも考えておかないといけないんだなということを改めて感じました。

子どもたちに必要な力と言えるのか分からないんですが、いつも私が思っているのは、それぞれが学ぶ楽しさを感じてほしいと思っていて、それは力というんですか、楽しく学ぶ力と言うとちょっとおかしいかもしれないですけども、やっぱり学ぶことの楽しさというのが分かったら、本当に何でも主体的になりますし、探究とかそういうところに結びついていくと思うんですね。それは子どものときだけじゃなくて、ずっと一生、学び続ける力になると思うので、学ぶというのは楽しいんだということを子どもたちに感じてもらいたいなということはいつも思っています。

この前、県の教育委員会の行事で叡智学園の見学に行かせてもらったんですけども、そこでまさに個別最適な学びというのか、それぞれにテーマを与えられて自分たちで調べて、グループになったり1人でやったりとかでいろいろ取り組んでいたんですけども、本当に楽しそうだったのがすごく印象的で、ああいう学びに対する態度というか、あれを

ぜひ廿日市でも実践していけたらいいなと思って、言うのは簡単なんですけれども、ただ、そのやり方として、ここに挙げられているような個別最適な学びとか、そういうのがやっぱり大切になってくるんだろうなというふうに思いました。

○松本市長

どうですか、廿日市の子どもたちは授業を楽しそうにやっていますか。

○学校教育課長

はい、それを目指して今取り組んでいるところです。叡智学園のような、例えば廿日市でも宮園小学校は、自由進度学習といって、1つの単元を自分で学習計画を立てて、自分のペースで学習していくということを一人一人が取り組んでいるという実践もあったりして、それを宮園小学校が廿日市市の他校にも普及をしているところがあって、宮園小学校は、市内だけじゃなくて全国的にも視察が来るようなすごい取組をしているところなんですけれども、そういうのが広がりつつあります。違う学校でも自由進度学習というのをやってみたいという先生も増えているし、ちょっと聞いた話によると、廿日市に行ったらそういう自由進度学習ができるから、廿日市で先生をやりたいというような人もいますというように聞きました。ぜひ、そういう授業の実践を広げて、廿日市市ではこんな楽しい授業をやっているよというのを言えるようにしていきたいなと思っております。

○松本市長

これは廿日市独自というか、廿日市はかなりほかの自治体に比べて進んでいるんですか、その自由進度学習というのは。

○学校教育課長

これは先進的に取り組んでいる、他県にもいっぱいそういう実践校というのはあるんですけれども、県内で言ったら廿日市は宮園小学校がトップランナーで走っているんですけれども、それに追随する形で広がりつつあるという意味では、自治体としても進んでいるほうかなというふうに思います。

○松本市長

そういう学習方法は、今後、市内の学校に広げていくわけですか。

○学校教育課長

そうですね、具体的に計画しているわけではないんですけれども、今は自然発生的に広がっているところではあるんですけれども、実際、市内での研修会なんかでそういう実践報告をする場面が多々あるので、自然とそういう意味では広がっています。

○松本市長

片嶋委員、いかがでしょうか。

○片嶋委員

私は3点考えました。

まず、ICTを活用した授業ということで、廿日市にもGIGAスクール構想において、この中の前倒しということもあったんですが、1人1台の整備をされたということです。市長さんも広報の年頭挨拶で、これから市役所はデジタル・トランスフォーメーションに向けて組織改革に取り組むということも言われておりました。身近な社会、この廿日市も今後変わっていくんだなというふうに、その広報を見た人はそう思っただろうと思います。個人的には、クレジットカードのタッチ決済とか確定申告なんかも以前とかなり違ってきていることを実感しております。

教育もこれからの時代に対応していかないといけないということで、児童生徒に1人1台のタブレット整備を終えているだろうと思います。そうした中で、それと同時に市民感情としてお金がかかっているなど、成績がどんどんこれで上がっていくんじゃないかとか、導入したら何の教科がよくなるんだろうとか、目が悪くならないのかなとか、興味を持って学習に集中してくれるんだろうとか、様々にうちの女房も素朴に思ったり、近所の人と話してもそう思うわけですね。うちも何台もパソコンを変えているものですから、これは一体、更新の際はどうするんだろうとか、そんなことも近所の人たちとしゃべるときには出てくるわけです。期待感とか心配も非常に抱いていると思うんですね。

現場の先生方も、先般、四季中で授業を見させていただきました。ICTを活用した授業システムの展開に非常に工夫されていると思いました。しかし、廿日市市全体では、まだフーフー言われているんじゃないかというふうに思っております。今が先生方の踏ん張りどころだなという感じがします。本屋さんに行ったらこの手の本がかなり出始めておりますし、先生方は非常に研究熱心ですので、2、3年ぐらいたらかなり進むんじゃないかとも思います。デジタル教科書の導入も来年ぐらいというふうにも聞いております。

文科省の言う、児童生徒がタブレットを使いこなすことによって、協働的で創造的な学習に移行して主体的で個別最適な学びの学習を補助するといった活用方法は、頭では何となくぼんやり分かるんですね。松本委員さんが言われたように、私も1学年に行かせてもらって勉強させてもらいました。あそこの学校は先生は支援するという立場なんですね。私がおその班、2、3人の中学部の生徒で、何しているのかと言ったら、「ハリー・ポッター

一」の英語版を翻訳しているんですと言うわけですね。それは国語と英語の2つの領域を合わせた授業だというふうに先生は言っていました。

そのやったことを、2人でやっていたんですが、6人でまた翻訳した中で、ほかの翻訳、違う番組の翻訳をした子どもたちと合わせてディスカッションするんだということで、もう座り込んでタブレットだけで6人だけで授業をしているわけですね。授業時間も物ものすごく長く取っていましたね。そういうふうに、私は今までそういう授業をしてないので、どんなものだろうというのが市民としても分かんないんですね。個別最適な学習に行くんだらうということは分かるんですよ、もちろん。それらを具体的に成果事例のような形で、今、課長さんが言われたように見直しをやられたということなんですが、成果事例として先に児童、生徒、保護者に示すものか、それともやる中で発展的に身につけて、ああ、これは学習なんだということを自然発生的に生徒が学んでいくものか、そこが私自身体験してない、市民の方もそれは体験してない、そこがちょっとよく分からないところがありますね。

廿日市市役所の庁舎だったらDX化に向けて、例えば専門の部署が研究して横断的な組織改革は実行できると思います。しかし、各学校現場というのは、各教科担当がICTを活用した授業展開をするには、ゆとりがもっとあればというふうに思います。その研究した組織的なところというものを、ICTの指導員とかICTの支援員とかがいらっしゃるとは聞くんですが、それでも学習方法、ただICTに置き替えただけの授業になりかねない部分というのは非常に持っているわけですね。だから、もっとICTへの指導員とか、ICTの支援員の増員を図る必要があるんじゃないかと思います。

また、導入されていて思う、そもそも論なんですけど、整備が早く先行してしまって、廿日市市の教職員の皆様のICTの技術力の把握はどのようになさっているのか。それはちょっと気になります。

そして、多くの学校が導入されていて、各学校の進捗状況の把握とか、ICTの教育の活用をスーパーバイザー的にする組織とか、そういうところが、市役所、教育委員会のそこらが組織的にどう置かれるのかなというふうにも思います。それと、これを導入した中で、児童生徒、保護者の評価などはどうなんだろうかと、そういうことを感じました。

2点目なんですけど、片や非常に多額のお金を使って教育投資しているわけですけども、片や非常に不登校が増えていると。5ページにもありました、例えば子ども相談室の児童生徒数も非常に増えている。私もちょうど行ったときに小1の女の子がお母さんと一緒に

入ってきたわけですね。私は、小1ですから不登校が長期化するなというふうに思ったんですね。で、ものすごく設備がいいんですね。よそもそういうところを何カ所か行かせてもらったんですが、非常に廿日市はすごい整備。これはそこで、中の指導というのは、子どもたちが本当に第3の居場所として素直に、学校に行かなくてもここでやっていければいいんだという自己肯定感、納得感、落ち着きを持てるような設備になっているなどというように思いました。先生方も非常に一生懸命やられていて、私の以前の不登校の概念というのは、今、大分変わってきているようなのがありますね。廿日市が、その子育て計画を見させていただいても、出生率というのはかなり全国平均にも近づいているから、今後、がくんと下がるんじゃないかと、横ばいに行くんじゃないかというふうに思うんですね。そうしたときに、特別支援学級、通級指導教室等の子どもが増えてきているというのは、もちろん廿日市の福祉ネットワークというのは非常に整備されているんですね。これは、例えば広島市の人から見ても、廿日市の福祉ネットというのは子どもが入ったら総合的に見てもらえるということ、そして子どもたちの放課後対策事業等も廿日市特支でやられているということと、中学校を卒業したら高等部が廿日市特支にあるという、そういうところで整備されているからがくんと増えてきているんじゃないかと思うんですね。

そうしたところで、不登校の子どもたちも増えている現実を、やっぱり将来、廿日市がひきこもりの成人の約半数以上が不登校であったというふうな報告も見たことあるので、やはり不登校の子どもたちがいかに進路を確保して、その保障していくのかというのを、今、行政がものすごくバックアップしている。疾病とかそういう状況じゃない不登校については、現場の学校の校長さん、先生方が、以前の私たちがいたときの不登校の考え方と大分違わしているんですね。違わすというのは連携を持ってやっているということですね。そういうのがものすごくあるので、この資料を見たら県全体よりも不登校なんかはかなり高くは出るんですが、暮らしやすい、対応してもらえるとということで広島市の方からかなり来ているんじゃないかと思うんですね。

それと福祉的には、佐伯区の広島市の療育センターが、廿日市の子どもをもう入れなくなったんですね、いっぱい。こちらにくさのみ作業所がやっているのがありますね、発達障害センターですか、正式名がちょっと分からない。そこでまた、ここらの団地に小さい子どもさんが入ってきているという現実があるんですね。だから、そこで入ってきて、行政の福祉ネットに入らせてもらってケアしてもらえると、そういうことで、障害のある子どもの保護者の方というのは非常にここは住みやすいというふうになっているわけです。

3点目に、宮島が今度、訪問税を導入されるということを聞きました。私が秋田に旅行したときに角館に行きました。角館もご存じのように宮島と同じように歴史町並み保存です。私が旅行で行ったときに、その中学生が、普通の日だったんですが、授業で私たちに町を紹介させてくださいと言って、たくさんいるわけですね。ものすごい目がきらきらしていて、自分たちの誇りの町はこうなんだ、ああなんだと説明してくれるわけですね。

翻って、では、廿日市の子どもたちは宮島をどこまで知っているかと言ったら、これは自分の子どもたちを考えてもあんまり知らないんですね。これから宮島で観光業として廿日市が生きていくのであれば、やっぱり宮島をもっと身近に感じていただいて、これは宮島だけじゃないんですけれども、廿日市に誇りと愛着を持って、住み続けていきたいという子どもたちをやっぱり育てなきゃいけないと思うんです。そうしたときに、やはり、今まででも宮島の学習はされていると思うんですが、例えば歴史資料館が新しく今度造られると聞いて、例えば廿日市の小学校3年生、4年生はいつぺんはそこに行くんだとか、何かそういう予算化ぐらいはしていただいてもいいんじゃないかという思いを感じました。すみません、長々と。以上です。

○松本市長

ありがとうございます。

まず1点目、DXの件ですね、お金がいっぱいかかっているのになかなか市民の皆さんに、やはりちょっと市民の皆さんへの情報発信というか、そういったものも少し足りてないのかもしれないし、そもそも現場の教職員さんが本当にDXというデジタルの力というものをしっかり理解してやっているのか。それとあと、現場はかなり疲弊というか大変な思いをしているので、もう少しマンパワー含めて増強するべきじゃないかというような意見だったかと思います。今後、教育現場にデジタルを浸透させるために、組織の在り方とか、そういった全般的なことだろうと思いますけれども、何か考えはありますか。

○学校教育課長

まず、先生や子どもたちのスキルがどれくらい身についているかという件については、先生については、毎年国がやっている教育の情報化という調査の中で先生のスキルについて問われるところがあって、そこをもって市としてはいろんな先生のスキルの状況を把握しているということです。おおむね、その結果なんですけれども、昨年度で言ったら、授業中にICTを活用して指導できるかどうかというようなところで四つぐらい質問があるんですが、その質問に肯定的に回答している先生が小学校で72%、中学校で77%、だか

ら割と使えるという先生が多いというふうに思っています。

子どもたちのスキルはどうかというと、これは市教委のほうで独自にアンケート調査をしているんですけども、どの程度学校で使っていますかという頻度であったり、どのような内容で使っていますかという、例えば調べ学習で使っているのか、あるいはプレゼンテーションで使っているだとか、そういった使い方なんかも調査をしているところです。授業中の利用については、どんな形でも大体週3日以上は使っていますと答えている子どもたちが7割弱、小学校、中学校合わせているので、学校の方でもタブレットの活用というのはある程度されているんだなというふうに思います。

ただ、その活用については、やっぱり単純に調べるとかということでは使われることが多いみたいで、もう少し、例えば自分が表現するとき、プレゼンの形で、さっき叡智学園の話がありましたが、このタブレット一つで議論するだとか、説明するだとか、ああいったような活用の仕方というのをこれからしていきたいと思っていて、それを実現していくために、うちにはICT支援員・指導員がいるんですけども、これをもっと増員したらどうだろうかという話もあったんですが、一応、国のほうでは4校に1人はそういう支援とか指導員を配置するようにと、それが標準というふうに言われているところで、甘日市はどうかというと、今、学校は27校で、施設で言ったら24施設、小中一貫校があるので24施設あります。それに対して5名のICT指導員・支援員がいますから、ちょっと今、水準よりも低いんですけども、次年度それを6名にしていくという計画をしておりますので、一応、国の基準には追いつくかなというふうに思っています。

その中で、ICT指導員のほうが、例えば先生に対しても指導ができるような技能がある方、具体的に言うと退職された先生がICT指導になっているというケースがあって、その中でも、昨年度、阿品台東小学校の校長先生をされていた方が退職されてICT指導員になってくださったんですが、この方がすごいICTに強くて、市の指導員・支援員をまとめてチームみたいな形にして、そこから学校に向けて研修をしているというような組織は、一部、教育委員会の中では持っています。そこをしっかりとこれから充実していきたいというふうに考えているところです。

○松本市長

はい、分かりました。

じゃ、2点目、不登校ですね。これも施設を整えたら、また子どもが新たに増えるというような状況がある中で、本当に答えが、ゴールがなかなか見えない状況ですけども、

今度、来年、新年度から大野にもこういった受入れ枠を増やしていこうというような考え方で、こういった不登校とか、SSRみたいな話もありますけれども、そういった考え方について少し情報提供いただけますか。

○学事・生徒指導担当課長

不登校の前に、まず学校が魅力的な場所であるべきだということが大前提としてあります。やはり先ほどの話す力とか聞く力とかいうこともありますけれども、人との関わりによってそういう力は育まれていきます。したがって、まず、毎日学校に行くことが楽しくて、自分の存在意義を感じていることが大事だろうと考えます。そのために今までつながり支援プロジェクトという人の役に立っているという自己有用感を高めていこうという取組を行ってきましたが、学校につないでいく取組ですね、不登校で言えば未然防止に当たりますが、これをしっかりやっていきたいと思っております。

もう一つは、不登校児童生徒数という物差しで見れば、確かに全国的にもそうなんですけれども、本市でも増加傾向にあります。それも一つの指標ではありますが、新規の不登校児童生徒数、新たに不登校を生まないという、未然防止の取組にもつながると思うんですが、そのような指標も別の側面として持って見ていかないといけないなと思っております。

あと福祉との関係という話もありましたけれども、学校教育課としては、やはり中学校の出口のところでみんなが進路を実現するということが、不登校の総合対策もひっくるめてですけれども、大きなゴールであると思えます。

それともう一つは、中学校を出た後にどうつなげていくのかというところが、横断的というか、横とのつながりを持って進めていかないといけないと思っております。これは学校教育課だけの取組でできるものではないので、より一層、他課との連携を図ってまいりたいと考えているところです。

○松本市長

ありがとうございます。例えば宮島の話、廿日市の子どもたちが宮島をどこまで知っているのかと。宮島を維持していくためにやはり担い手というのは必要でしょうから、しっかりそういった意味でも次世代へつないでいくと。歴民これから整備しますけれども、その辺の考え方について、お願いします。

○教育部長

今現在、計画をしております、ターゲットということで、修学旅行生であるとか、

そういった子どもたちというところも当然見据えて整備を考えていますので、そういった意味では廿日市市内の小学生、中学生にも宮島に興味を持っていただけるようなそういった内容ということをしっかり考えていって、そこを利用して学習であるとか、そういったものにも活用していきたいというふうには考えております。

○松本市長

山川委員、お願いします。

○山川委員

私も前提として難しいなというのは、よく講演なんかするときに、おっしゃった人口減少という図を見ますと、1960年、50年ぐらいの数と、それから2050年ぐらいの数って同じなんですよ。だから、人口減少とはいえ、私たちはその少なかった時代を知っているとか、そこも含めて生きてきているので、昔に知恵があったりというのを述べるんだけど、2050年より先を生きる人たちって、全く昔の知恵がないとか、過去を経験したことがない。だから、その子どもたちに対して何をということについては、本当に今、べき論としてではなくて、今、私が感じている問題を解決していただければという観点で、こういう子どもたちを育めればいいですねということではしか言えないんですけども、そこは私は、実はずっと変わらなくて、私自身の考え方というのは、

1つは、1人の子どもも自分を否定しないとか、要するに自己受容ですよ。それはもう本当に全ての子どもが、外国籍であろうが、障害であろうが、全くそういったことは関係なくということを考えています。その上で、自分が持っている力って何だろうということに気づかせてあげるとか、それが教育の中には必要なのかなというふうに思っています。いわゆるエンパワーメントと言われるようなところですよ。

実は、そうすると学校だけでそれをやるというのは限界があると思っています。長期休暇もあるし、放課後もあるし、子どもたちの生活圏を想定した教育的な関わりということも発想としては必要だと思っています。それがもしかしたら教育だけで足りなくて、さっきおっしゃった福祉の視点も必要になってくるかもしれないし、学校ありきで子どもたちがどうあってほしいとか、子どもたちの育みを、ではなくて、もう少し子どもたち一人ずつの生活エリアというのをちょっと想定しながら、そこでどういう関わりが必要かなというふうに考えていければと思っています。

ただ、そうは言っても行政としてということになると、個々の家庭に入り込むことはできないので、そうなる则ち何かの制度を使うとなると、まず使えるのは社会教育だろうと思

うんです。今回の資料を拝見しても、社会教育についての資料が全然出てきていなくて、例えば「2」の「国や県の教育改革」というところを拝見しても、これは学校教育改革なんですよね。2018年の中央教育審議会の答申から、はっきり国は生涯学習じゃなくて社会教育という言葉を出していて、方向は一緒なんですよ。DXを子どもたちが活用できるようにということとか、誰一人取り残さないとか、ウエルビーングとか。地域・学校協働活動もその枠の中で出てきているので、もし本気で誰一人子どもたちを取り残さないということであれば、一つは学校教育の意義、それから逆に学校教育の限界ということも想定した上で、子どもたちの生活エリアということを考えて上でどういう関わりができるかという発想も一つ必要かなと思っています。

もう一つは、自己受容で、ありのままの自分でいいということだけで子どもたちが生きていけるかということ、それはイノベーションということが言われていたりとか、いろいろと追いつかないといけない技術とかということもありますので、そうした中で、いわゆる自己実現力というのが必要になってくるだろうと思うんです。だから、ありのままの自分はこうなだけけれども、こうなりたいなと思うという。それが多分、今回の資料の「1」で言うと、日本の18歳の社会の当事者意識という、ここの部分がやっぱり低いというのは、自己実現力というか、なりたい自分になるんだという、その前提としては多分自己受容が必要で、そこが足りないから頑張るんです。足りないから面白くないことでも、なりたい自分になるためだったら一生懸命勉強もするんだと思うんですけれども、例えばなりたい自分が見えてこないというところの、何かそこを教育としては適切な介入が必要かなと思っているので、二言で言うと自己受容と自己実現ということですよ。

自己実現を考えていくにしても、また大島委員のお話に戻るんですけれども、これも学校の先生の中だけだと、学校の先生という大人像しか見えてこないで、もっといろんな人がいるよというのをどんどん見せていけばいいなというふうに思うんです。先生が決めた、「この人を見て」というのじゃなくて、いろいろ見せていく中で、子どもが、「この人、面白いよね」とか、「これ、もっと話聞きたいよね」という人が出てくると思うので、そういった意味では多様でたくさんの大人たちの出会いというのが自己実現を広げるんだと思いますし、それを学校の中だけでやるのは難しい。最終的には学校に集約していくんですけれども、ぜひキャリア教育についてはどんどん外の力を借りていく。さっき社会教育と言ったんですけれども、じゃ、廿日市の社会教育力がしっかりとあるかとなったときに、そこの部分が多分、お互い不安というか、社会教育をやっている、子どもたち

を一緒に育む力があるかなという不安がある。学校としても、社会教育、例えば公民館の職員の人と一緒に何かできるかなというところまで、まだ行けてないんじゃないかという気がしていて、ならば諦めるかとなると、さっき言った子どもの生活エリアをベースとして、子どもたちに自己受容とか自己実現ができるようにしたいよねというふうに、学校教育と社会教育、その社会教育の中には民間の社会教育というのも入っていて、そこが共通して、こんな子ども育みたいよねという目標というか、目指すところを持つことで、私たちも力を出さないといけないんだというふうに思えるのかなというふうに思う。子どもの育みとしては、本当に変わらなくて伝統的に自己受容と自己実現なんですけれども、それを成すのに、今、廿日市の、制度的に言うと社会教育と学校教育というところにある人たちが、そんな子どもたちを育みたいよねと、これも教育振興基本計画に「ふるさとに愛着のある」というのは書いてあるので、そこはそうだよねということの本気でみんな信じていくような、そんな場をつくったり、研修をしたりということが必要なのかなというふうに思っています。

あと、課題としては、これは本当どこに行っても言われるんですけども、要するに18歳の子どもたちをどこにつなげたいという。要するに廿日市にいてほしいと思うのか、それとも世界どこにいてもやっていける子どもたちを育てるのかというふうに思うのかということによっても、少し自己実現への介入の仕方、どんなキャリア教育を持っていくのかも違ってくると思うので、そこはある程度、多分、囲い込もうという気持ちは皆さんはないと思うので、どこにいてもしっかりとやっていける子どもたちにしたいよねというようなことを、それもしっかりと共有しておくことで、今度は子どもを生活エリアで支援してっていると、どうしても地域の人って地域の子どものくくりをしたくなるので、地域の行事に参加しないと駄目だよとか、地域に貢献してくれないと、という囲い込みが始まる可能性もあるんですよ。なので、生活エリアで子どもたちをしっかり育てていくんだけれども、それは羽ばたくよというか、そこも共有しておくというか、前ちょっとお話ししたんですが、教育というものを学校現場だけじゃなくて、もうちょっと広く共有できるような方法が必要だと思っています。何を育むかはさっきお伝えをしたとおりです。すみません、ちょっと理想論的で。

○松本市長

今、先生おっしゃった、なりたい自分が見えてこない、そのために学校教育と社会教育、要は教育委員会の部分と市長部局が一緒になってやっていかないといけない。先生が前お

っしゃっていた、これ飛騨市のことですか。

○山川委員

そうですね、飛騨市もそうですし、この前、熊本市に行ってきたんですけども、熊本市も今そういう形で動かれていますね。私が参加してきたのは、「まちのがっこう」というのに参加をしたんですけども、そこは高校生が小学生に町の魅力を伝える講座を実施するということなんですけれども、DXを使うんですよ。ICTを使うので高校生だけじゃちょっと難しいよねというので、大人たちがそのサポートに入って、高校生と一緒に小学生が町の魅力を感じるものを創っていくという。その大人たちには高校の先生、中学の先生、小学校の先生、それからNTTの方たちとか、社会教育で行政の方、FMの方とか、そういった方たちが入って本当に町を母体にするという、そういうこともされています。

でも、私、一方で学校教育はすごい大事だと思っていて、バルテスという人が総合発達論と言っているんですけども、人の成長って三つの要因がある。その要素がどう働くかによって発達が違っていると言って、二十歳ぐらいまでで大事なものは、何歳のときに何を学ばないといけないのかというのが、恐らく発達という観点から言うと大事だというふうに、影響要因としてはとても大きい。でも、二十歳を過ぎるとやっぱりだんだん大きくなってくるのは、どの社会を生きているのかということになってくるので、就職しないといけないとか、結婚しないといけないとか、どの時代を生きているのかというのがすごく影響が大きくて、さらに、年代にかかわらず年とともにその人の発達要因として強くなっていくのが個別の経験という、どの時代を生きているとか何歳かではなくて、その人がどういう経験をしてきたかということです、というような考え方がある中で言うと、二十歳ぐらいまでの学校教育って、ある意味、年代で1つの学級で学ぶということについては、発達段階としては、意味があると思っていますよ。ただ、時代が今すごく変化してきているので、そこも必ず発達の影響要因にあるから、そこへの対応として今のような発言もさせてもらいました。以上です。

○松本市長

今、先生おっしゃったように福祉の視点も必要じゃないかということで、以前、先生から飛騨市と熊本市が非常に面白い教育をやっていますよということでご紹介いただいているので、そこをちょっと参考にしてみて、勉強してみてください。

○大島委員

今の山川さんの話がすごくいいなと思って、以前、やっぱりコミュニケーションをする、

教育部門の人とそうじゃない人がコミュニケーションを取る場がすごく大事だと思って、以前子ども議会されていた、ああいう形で子どもと大人と、その大人も教育に関わるいろんな人が意見を出し合える場、その中から廿日市はこういうふうな教育ができたらいいよねというのをより深くできる場というのができたらいいんじゃないかなと。そうすると多分、これからの求めているコミュニケーション能力とか、そういったところをものすごくそういう場の中で醸成できると思いますので、ぜひそういう、廿日市大学じゃないけれども、廿日市を学ぶ場というところ。教育って、今回、関わって初めて、教育ってこういうことをしているんだと思うんですけども、一般市民からすると教育ってすごく壁の中で行われているような形で、こういったいろいろ教育の、こういう議会の場の内容があまり伝わってないと思うので、それをお互い言い合える場。そこで大人はこんな未来を描いてほしいと子どもに直接言えて、子どもはそこにいる大人から、「こんな大人になりたいな」という場ができれば、いろんなことが少し進んでいくんじゃないかなと感じましたので、ぜひそういう場づくりができたらいいなと、今の話を聞いて改めて思いました。

○松本市長

ありがとうございました。子ども議会も新年度また引き続き開きたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

○山川委員

1点だけ、すみません。学校は横と縦だと思うんですよね。だからしっかり斜めが入るか、斜めの教育を廿日市は学校協働とか地域でやっているの、今のご発言もそうだと思うんですけども、やっぱり斜めの関係が入れる風通しの良さと、何かそういう実践があるといいなと思います。

○松本市長

面白いですね、斜め。いい表現ですね。教育長から今後の取組について。

○生田教育長

非常に大きな話になって、逆を言えば夢のある話なのかなと。小学校、中学校の義務教育が社会で自立するための基礎を培うということで、社会の形成者を育てるとというのが目的で、法で定められていて、それを考えると社会が変わっていくんだから、当然学校教育も変わらなきゃいけないというのはよく分かります。

そんな中で、自分も、今日ここで、どんな力なのかなというのを考えたときに、先ほども片嶋委員さんからもあったんですが、例えば去年就任してすぐに宮島学園に行ったとき

に、授業を見て、ものを言わないというか、表現力が乏しいなというのをすごく感じました。だけでも、去年の秋に小中連携の小規模サミットということで、県外からもたくさんの方がいらっしやって、そのときに昼から中学生が島内を案内してくれるんですが、そのときに、本当に自分たちの言葉でどんどん説明していました。間で「質問はないですか」と言うのでちょっといじわるな質問をしても、それにきちんと返してくれるんですね。特に選ばれた子じゃない、全員がそれをやる。だから意図して育てていったら、きっとこの子たちには非常に可能性があるんだなと感じました。1年ちょっとであれだけの表現力がついていくということは、そういったところをしっかりと考えなきゃいけない。

そんな中で自分自身を振り返ったときに、学校にも行ったけれども、市教委とか県教委の教育行政が随分長くなったんですよ。その中で、数年前までは、自分が市教委にいたときに、県教委とか、それからあるいは文部科学省からどんなことが下りてくるのかなというのを意識しながらいろんな仕事をやっていたような気がするんですよ。ただ、今はいろんな市町の教育長といろいろ話をしても、ちょっと変わってきているなというのを感じます。広島県に23市町がありますけれども、やっぱりその市町の独自性というのが問われているのかなというのを感じます。もっと言うと、今からどんどん変わっていくので、そうしたときに自治体間の差というのにも出てくる。今、既に出てきていると思うんですが、さらにもっと大きく、広がってくるんだろうなというようなのを感じました。

そういう意味で、今日、いろいろな委員さんからいろんな考えをいただきまして、非常に幅広い意見なので、これをどうまとめていくかなというふうには、ちょっと今、半分悩みながら、半分今後いろんなことをやってみたいという思いもあって。実は先日、事務局の職員でもこういったことをやってみて、そうするとこんな力が要る、あんな力が要ると、日頃授業を見に行き行って感じたことや、それから去年まで学校にいて、学校現場から事務局へ来て、外から学校を見たときにどう思うかとか、いろんな立場からいろんな意見も出ました。そこでディスカッションをいろいろしていく中でいくつか上がってはいるんですが、今日いただいた意見と併せて、今後、今もう既に計画している施策、そういったところにも、例えば校則の見直しということも今やっています。ただ、これも単純に見直して不適切な表現があったら変えなさいということではなくて、過程を大事にということをやっています。

その中で、先日、教育委員さんにも行っていただいた四季が丘中学校の例を言うと、校内だけでなく、保護者、それから高校の先生、小学校の先生、いろんな人からも意

見をもらって、自分だけのわがままというか勝手な意見ではなくて、いろんな人の意見を聞いて、それを自分なりの考えに変えてまた表現していくという過程を大事にしている。だから、結果はどうなるか分かりませんが、子どもたちが、さっきの資料の中には、社会を変えられると思うというのは非常に日本は低いということですが、そういったところにつながっていくのかなということを考えています。今言ったような、例えば人の意見を受け入れるとか、そういった力も必要になってこようし、ちょっとそのあたりを今からまとめて、今後、学校に、一つの取組をするにしても狙いが当然あるんですが、この場面でこんな力をというところも明確にしながら効果が表れるといいなと思っています。あとは、今、学校教育だけではなくて、もう少し視野を広げてというお話もあったので、そういったところにも今後、目を向けていきたいと思っております。

○片嶋委員

私、4ページのこの絵を見たときに、かなりぐっときたんですね。これが10年後、15年後にはどういう色合いになっているのかなというふうにも感じました。うちの息子は40過ぎですが、25年から30年前の廿日市の教育から、今、かなりよくなっています。これは自分で実感します。ハード・ソフト両面ですね。この4ページの資料を頂いて、ちょっとうなりましたね。先生方の指導のしづらさとか、授業内容をどこに絞ってやったらいいのか悩まれると思いました。やっぱり10年後、15年後にはこの色合いをどういう方向性にしたいのか、そこらも大きな目標になると思います。そのためにも、今、よく教科担ですね、小学校の教科担、専科担任制とか、今後、複数担任制とか、先生1人で指導できるのかなとか、そんな思いも感じました。以上です。

○松本市長

そうですね、これも、いつも私も学校を見学に行くと、こういう子どもたち本当に多いなということに驚かされます。私たちが子どもの頃から比べものにならないくらいで、これがこの先どうなっていくんだろうというの、本当に不安に思いますね。どうですかね、教育長。

○生田教育長

今日、山川先生が限界という話をされましたけれども、結局一斉指導の限界が来ていると言われてます。40人学級で一斉に同じことを同じように教えて、同じペースでというのはもう難しいと。今、個別最適な学びということで、さっき宮園小が自由進度というのがありましたけれども、それ以外でもイエナプランとか、いろんなやり方があるけれど

も、そういったことを今後、やっぱり学校の先生が、今まで自分が受けてきた授業から頭を切り替えて、今からはこういう個別最適な学びというのが大事だということへ持っていかないと、なかなかこれは対応できないだろうなと思います。

○松本市長

ありがとうございます。時間もちょっと迫ってまいりましたので、それでは次に入りたいと思います。

続きまして、第5の報告事項「はつかいち森の遊び場協議会の取組について」に移ります。事務局は関係者の入室の案内をお願いします。

(説明員入室)

○事務局

それでは、説明の前に説明員の紹介をさせていただきます。

観光課長の山田でございます。

○観光課長

山田です。どうぞよろしく願いいたします。

○事務局

はつかいち森の遊び場協議会、会長の戸野様でございます。

○はつかいち森の遊び場協議会会長

戸野と申します。よろしく申し上げます。

○事務局

副会長の飯野様でございます。

○はつかいち森の遊び場協議会副会長

飯野と申します。よろしく申し上げます。

○事務局

今若様でございます。

○はつかいち森の遊び場協議会事務局

事務局の今若でございます。よろしく申し上げます。

○事務局

それでは、説明をお願いいたします。

○観光課長

どうぞよろしくお願いいたします。

我々はつかいち森の遊び場協議会では、佐伯・吉和地域で提供するSDGs教育旅行プログラムの開発に取り組んでいるところでございます。そうした中、廿日市市の教育大綱の基本理念が「ふるさと廿日市」に愛着と誇りをもち、未来を担う人づくりということもあり、ぜひ市内の学校の利用促進を図ってまいりたいということもございまして、本日この会に参加させていただきました。

実際に行っている取組の詳細については、本日参加いただいております、はつかいち森の遊び場協議会の3名の方から紹介させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、戸野会長、よろしくお願いいたします。

○はつかいち森の遊び場協議会会長

森の遊び場協議会の会長の戸野と申します。よろしくお願いいたします。本当に短い時間なんですけれども、なるべく簡単に説明をさせてもらおうと思います。

まず、私たち、森の遊び場協議会、これ2年前に、旧佐伯町・吉和、今この辺で言う中山間の事業所を中心に、今までは各事業所各々が個別にずっといろいろな事業を展開してきたんですけれども、この中山間を、地域や、みんなで手と手を取り合って活気をつくっていきこうということで、今、10事業所、今年からは農家の皆さんや、あとは釣堀、養殖をしている方へどんどん事業所も増えて、いろいろと活動していきこうと思っています。特に、やはり地域の中で、地域の学校と一緒にいろいろな課外授業をやりたいと。今、学習指導要領も、生きる力とか、課外授業をやらなきゃいけないけれども、どういうふうに進めていいとか、いろんな問題があると思うんですけれども、森の遊び場協議会では、本当に生きる力というのを中心に、いろいろな大学の先生等と連携しながらいろんなプログラムを構築してきました。今、特に日体大の野井真吾教授という、結構、3泊3日のキャンプをすとか、あとは体力測定など、今、学校の中で元気がない、なぜ元気がないんだろうという研究をしている先生がいらっしゃいます。そういう先生と共に、課外授業の力、そういったところで子どもたち、チームビルディング、いろんなことを今までの課外授業では新しいことをどんどんやってきた。全ての事業所で、今、特に学校関係の中では、発達障害の子どもたちや、いろんな合理的な配慮が必要な子どもたちというのが年々増えています。そういったことも我々森の遊び場協議会ではしっかり勉強して、今も対応しながら、その部分が置いてきぼりにならないようにさせてもらっています。

いろいろ資料、たくさんの絵と写真がいっぱいありますけれども、全ての事業所でスタッフの共有やいろいろなことが同じように全てできるようにやっています。たまたまうちはアーチェリーなんですけれども、アーチェリーの例で言うと、例えばパラスポーツのように目隠しをして2人1組になって、1人だと全然的に当たらないんだけど、後ろの人と一緒に見ながらやっていくとか、目が見えなかったらどうなのかとかということや、やっぱり安全教育ということ、そういったことも踏まえたプログラムというのを細かくやっていますので、いろんなこと、料金や、あと内容というのも、かなり今までの課外活動でやっている内容よりはクオリティーを持たせた準備もありますので、ぜひ、教員の方や地元の方が、研修や体験型で、先生方もご招待するのでぜひやってみてもらって、感じてみてもらって、地元の子どもたちが地元をもっと深く理解して地元を愛する、そういう何か課外活動や関係性が持てるようになったらと思っています。

まず、話ばかりになってしまうので、先日、広大附属小学校の課外授業をやった動画がありますので、その内容を見ながら、簡単に事務局より説明しながら見ていただこうと思います。

○はつかいち森の遊び場協議会事務局

先ほどお話がありましたように、10月20日・21日にかけて、初めて「森で育む生命（いのち）の源流教育」ということをテーマに、林間学校ということで広大附属小学校5年生63名の子どもたちに、実際1泊2日で佐伯・吉和を体験してもらったものを映像にしてあります。

朝8時に広大附属小を出て、10時から、まずこのアーチェリー。森の中でこうやってアーチェリーを、フィールドを体験しながら歩いていくという形でやっていきます。今はお昼ご飯です。森の学習ですとか、森の植生ですとか。間伐ということは知っていても、実際、木が倒れるとか、木の重さとか、こういったものを森の中で育てていく現場を子どもたちに体験してもらいます。ここからはビオパークづくりということで、森の素材、特に木を生かして自分たちで楽しむ遊具を子どもたち自身が創意工夫で作っていくことをやっています。ブランコも子どもたちとインストラクターと一緒に作ったブランコです。これによって竹林で伐採して。

ここからは、もみのき森林公園になります。標高800mから900mの森というのが、どういう植生があって、生き物が住んでいるのかというような共生の学習をここではやっています。森の中で自分たちならではの遊び方を工夫したり、一緒に協力して乗

り越えてみたりというようなことも、このアスレチックを使ってやっていきます。アスレチックも、次の子のためにこうやってロープを持って帰るというようなことも含めて、思いやりを持ちながら学習をしてまいります。

動画としては以上のようなところで、少し感想も含めて戸野さんのほうから。

○はつかいち森の遊び場協議会会長

今までは課外授業、私も今回いろいろと勉強して、カッターの使い方、あとは丸太を切って、やすりで削って、ハンダごてで何か記念品を作るなど。もう一つ上の、みんなで間伐をし、その竹、今、日本全国、孟宗竹に困っていて、それでじゃあ遊具って、公園にあるものじゃなくて自分たちで作れるものだよとか、これどうやって作る、という、本当に自分たちがゼロから考えてやっていく。木を剥がすのも、もちろん壊れた、折れた、火ばしのかすとかもちょっと落ちていたんですけども、皮むき器はあるんですけども、みんな石を持ってきたりとか、その辺のあるものを探してみんなで皮をむいて、その1時間、班の中で丸太の皮を全部剥がして一本橋を作り、丸太を運んだやつも、飛び石を作ったんですけども、その飛び石も普通に軟らかいところに木を植えるだけだとグラグラで危なくてしょうがないです。じゃ、これをどうするといったときに、石を周りに詰めたり、周りの土はちょっと川のほうから硬そうな真砂みたいなものを探してきて、ちょっとまた水でたたいて硬くするとか、本当いろいろ細かいところをどこまでできるかというところをゼロからやる。

今は、たまたま、私のところにはイギリス人とアメリカ人がおります。2人とも教育関係に長けていて、1人はケンブリッジ大学を卒業し、1人はシアトル大学、上智大学という日本に結構精通していた。やはり向こうの学びとかアウトドア、あといろんなことも日本とはかなり違います。彼らもアーチェリーランドだけではなくて、もみのきや、あとクヴェーレや、いろいろなところに行って、スタッフも共有していくということもやっています。なので、アウトドアプログラムに関して言うと、なかなか学校の先生方が全てできるかという、難しい面ですごくたくさんあると思うんですけども、そういったところもうまくうちの協議会のほうでいろいろフォローして、今までやったことなかったような体験をどんどんできたらなど。特にチームビルディングですね、やっぱり僕たちもそこまでやるのは上手じゃないんですけども、特にこの外国人たちはアンコンシャス・バイアスという、ふだん僕たちが無意識のうちに偏見を持って、いろいろ知らず知らずに思っていることとかということも一回ゼロにしてスタートして仲間づくりを一個

ずつやっっていこうというプログラムも、かなりハイレベルなことを会社の研修なんかでもやっているんですけども、そういったことも子どもたちと一緒にできるのかなと。

なので、本当に今からこのはつかいち森の遊び場協議会は、僕たちの知恵だけではなくて、今、中小機構独立行政法人の方のサポートや、プロのサポートや、あとはいろんな大学の先生方のサポートや、いろんな方の知恵をいただきながら、今から地域の子どもたちと、あと僕ら地域の事業所が、どういうふうと一緒にお互いが学びながら、地域の貢献とか興味を持っている子どもたちと一緒に育っていくためのサポートが何かできないかなというのを、今回、皆、事業所もいろいろ、こういうプログラムを展開したいと思っていますので、ぜひ。廿日市以外のところで今ほとんどやっていると思う。一つだけですよ、阿品台小学校や中学校。ですけども、あとはもう全部、廿日市外でいろいろやっていると思うんですけども、この廿日市の中でこういった課外授業やいろいろなことを展開できるように、ぜひ学校関係の方にもご検討いただいて、来年、再来年、何年後か分かりませんが、それが少しずつ実を結んでいくようにできたらなと思っていますので、またいろいろ質問や何かありましたら、この協議会の方や市の観光課の方にもお問い合わせいただけたらと思います。

○はつかいち森の遊び場協議会副会長

私は広島リゾートの飯野と申します。今、施設としては、めがひらスキー場、今、スキーシーズン真っただ中ですけども、めがひらスキー場を中心に、クヴェーレ吉和、それから市の施設を運営委託させていただいております、魅惑の里とスパ羅漢というのを運営させていただいております。いずれも私の方で責任者として見させていただいているんですが、主にこのはつかいち森の遊び場協議会の中では、外部に向けてのPRも私の方で兼務させていただいているというような状況です。例えば、スキー場を営業に行くときに、この森の遊び場協議会の状況であるとか、こういったものを受け入れられますよ、宿泊もできますよ、そこからこういうプログラムがありますよというようなものを、今後、問合せがあったときに私の方で一括で見させていただいているというような役割を担っているんですが、当然県外に持って出ますと、こんなのがあるんだね、フィールドアーチェリーってこんなのかなだとか、もみのき森林公園は大きいけれどもそんなこともできるの、という知らない方が当然たくさんいらっしゃいますが、今、画像を見られて皆さんの中でも、そんなこともやっているの、みたいなことを思われた方もいらっしゃるんじゃないかなというふうに思っております。一番は、やはり地元の人に地元のことをもっと知っていただ

きたい、単純にこれが一番です。それを知っていただいた上で、より深い教育であるとか、今、会長が言われたような、もっと情操教育、体験型教育、いろんなどころにつながっていくところに向かっていけばいいなというふうには思うんですけども、まず、やはり地元のことを地元の間が知らないと恥ずかしいよねというのを根本に、私も立場としてはこの吉和のことを中心にやっております。ウッドワンから出向してやっている人間でございます。なので、ずっと廿日市のことを、廿日市にしながら、その仕事をずっとしながら、廿日市を知り、廿日市を愛し、廿日市を知らしめるというような、まあ形は違いますが、そういったことをしてきた自負がございますので、それをさらに学校教育の場にも落とし込んで、子どもたちにもっと地元を知ってもらおうよということをちょっと念頭に置いていただいて、今後、我々の方にも目を向けていただければなというふうに思っておりますので、今後ともよろしく願いいたします。

○松本市長

ありがとうございました。今の報告で何かご意見等がありますか。

○大島委員

非常にすばらしい取組だと思いました。私も実体験として、小っちゃい頃、海とか小学校で遊んでいて、大学で関東へ行ったときに、海と山で遊べる町だったというのがすごく自慢だったというのもあって、それを多分、今の子どもたちって、あまり親がスキー場へ連れて行かないとか、山に行かないというのがあるので、ぜひそういうプログラムに入れば、それこそさっきの廿日市らしい教育、廿日市らしいプログラムとしてできたらすごくすてきだなと思いました。確かにわざわざよその地域へ行ってしなくても、こんなに地元にあるんだったら、まずは地元で取り組んでみるというのも学校側に検討していただくとすごくいいなと思います。

先日、県の偉い方といろいろ酒の席で話している中で、広島で今後ビジネスをするんだったら、今一番、可能性があるのが林業という話も県の方も言われていたので、そういったのに触れる機会でもあるし、何かすごくすてきだなと感じました。以上です。

○松本市長

ありがとうございます。そのほか何かございますか。山川先生、よろしいですか。

○山川委員

私、修道大学の教員なんですけれども、以前、実はもみのき森林公園に泊まらせてもらって、新入生のオリエンテーションをさせてもらっていたんですけども、新入生が10

0名を超えたときに泊まれなくなってしまったというので場を変えたんですが、このあたりってどうですかね。

○はつかいち森の遊び場協議会副会長

宿泊のことだけでいうと、やはり1つの施設で言うと、どうしても上限が100人、我々のクヴェーレ吉和という施設でいうと150人というのがマックスになってしまうので、今、この協議会の中にもみのき森林公園さん、クヴェール吉和、それから潮原温泉さんということで、これらを合体させると300人規模ぐらいまでは何とかいけるのかなというふうに思っています。それが、善し悪しあると思うんですけども、一応そういうところで連携してやっていきたいというのも根本的にはありますので、そういうふうに捉えていただければと思います。

○山川委員

すみません、個人的で。本当、役目としては大島委員おっしゃっていただいたとおりで、すごく廿日市らしくていいです。ありがとうございます。

○大島委員

僕らの頃は三滝に毎年行っていた気がする。

○山川委員

そうです。三滝なくなってしまったんですよ。

○大島委員

あ、そうなんですね。

○山川委員

なので一層、本当にそういう場がないので。

○松本市長

よろしいですか。いいですか。ありがとうございました。しっかり参考にさせていただきますので、ありがとうございました。

本日、貴重な意見を大変いただきましてありがとうございます。しっかり参考にさせていただいて、今後、取組に生かしていきたいというふうに思います。

本日の議題は以上となりますので、進行を事務局にお返しします。

○事務局

長時間にわたり、皆様ありがとうございました。

次回は3月下旬に第2回目の開催を予定しておりますので、またご案内申し上げます。

またその際はよろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは、以上をもちまして、令和4年度第1回廿日市市総合教育会議を閉会いたします。皆様、お疲れさまでした。